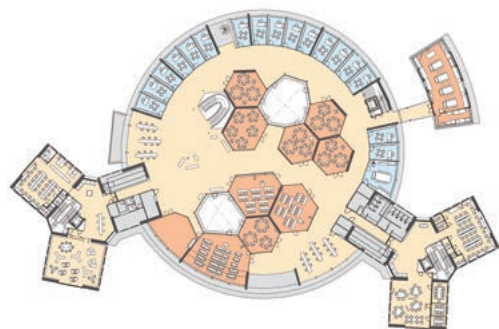
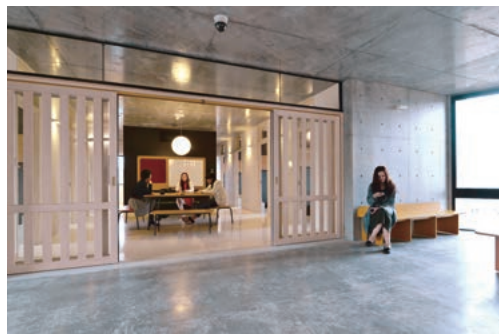




2階平面図



屋上庭園に向かい合う日本文化教室



学生寮のリビング。木格子戸を介し共用土間に繋がる。



全景。2つの学生寮と円形校舎が一体化した建築



山梨学院大学 国際リベラルアーツ学部棟

選評

大学の創立七〇周年記念事業でつくられた新しい校舎と学生寮である。これは多国籍の留学生が在籍し、日本人の学生も必ず海外に留学するプログラムを持った全寮制のチャレンジングな教育を行う施設だ。現地調査では、まず最初に建築主のサイドから新しく立ち上げた国際リベラルアーツ学部の教育理念が明快に語られた。人と知識の多様性と繋がり、アクティヴで多方向的な教育、透明性と開放性、グローバルレτζジなどである。設計者はこうした基本理念を受けて、周辺環境やキャンパスを横切る高圧線などに配慮しつつ、

いかに空間化していくかという翻訳の作業を丁寧を試みた結果、円形をかたどる校舎と両側で連結する学生寮の二棟が一体となる、学びと生活の場をつくりだした。全体のキャンパス計画のなかでも、完全な円とY字を組み合わせたプランは、理想的なコミュニケーションのようでもあり、シンボリックな存在のように見えるだろう。しかし、空間は開かれている。

実は現地を訪れる前、事前資料からは、やや硬い感じの印象を抱き、あまり空間を具体的にイメージすることができなかった。しかし、本物の建築は見事にその予想を裏切った。ハニカム型の平面はすべて同じ正六角形ではなく、少しずつかたちが違っており、それらが連なる教室群は、両側に次の場面が展開するY字路の幾何学を導き、散策する喜びをもたらす。こうした利用者の動きとともに新しい見え方を次々と誘発する空間体験の面白さは、なかなか静止した写真では伝わらない。全体は円形の輪郭であり、外周には透明な個室となった教員室が並ぶが、決



BCS賞は、建築の事業企画・計画・設計、施工、環境とともに、供用開始後1年以上にわたる建築物の運用・維持管理等を含めた総合評価に基づいて選考し、建築主・設計者・施工者の三者を表彰する建築賞です。この賞は、1960年にはじまり2016年で57回を数えます。

< 2016年 第57回 BCS賞受賞作品 > 飯野ビルディング 大手町タワー／大手町の森 京都国立博物館 平成知新館 グランフロント大阪 高志の国文学館 ザ・リッツ・カールトン京都 住田町役場 東京スクエアガーデン 流山市立おおたかの森小・中学校、おおたかの森センター、こども図書館 日清食品グループ the WAVE 穂の国とよはし芸術劇場PLAT 八幡厚生病院本館 山梨学院大学国際リベラルアーツ学部棟 Ribbon Chapel 龍谷大学 和顔館 [特別賞] 札幌市北3条広場・札幌三井JPビルディング 日本橋室町東地区開発：室町東三井ビルディング、室町古河三井ビルディング、室町ちばぎん三井ビルディング、福徳神社

建築主より

未来型学園の創造を目指す山梨学院の新時代を牽引するにふさわしい建物が完成

山梨学院は、創立70周年の節目に2つの学部をスタートさせました。そのひとつが国際リベラルアーツ学部です。この学部棟は幸運にも伊東豊雄先生に設計を、清水建設に施工をお願いすることになり、お蔭様で四囲の山なみとも見事に調和した、学びと生活が一体化した大変機能的な、お洒落な建物となりました。

今回は日本建設業連合会からBCS賞の栄誉を賜り、心から喜んでます。この学部創設は、

未来の輝ける学園を目指した本学の新たな挑戦であり、今後はこの学部棟の建築にご尽力いただいた伊東豊雄建築設計事務所や清水建設からバトンを受け取り、多様化した時代のシンボリックな学部として豊かに育てていきたいと決意しています。本学の持ち味であるスポーツ振興のノウハウを活かし、満を持して開設したスポーツ科学部と合わせて、本学新時代の牽引車としての役割を期待しています。



山梨学院大学
副学長
古屋光司
Koji Furuya

設計者より

学ぶための「みんなの家」



伊東豊雄建築設計事務所
伊東豊雄
Toyo Ito

山梨学院大学国際リベラルアーツ学部はきわめて斬新、かつ意欲的な教育方針でつくられた学部です。教授の多くは外国人、授業はすべて英語、学生は全寮制で4年間のうち1年間は留学が義務付けられるなど様々な新しい試みが採り入れられています。

こうしたキャンパスライフを円滑にするためには、教室、研究室はガラス張り、食堂やライブラリーなどは言うまでもなく、随所に学生達

が対話できるコモンスペースが充実しています。言い換えればここは、学ぶこと、食べること、リラックスすることなど生活のすべてが用意された「みんなの家」なのです。

大学側のこの取組みに刺激され、我々設計チームも大いに気合が入り、またそれを清水建設の施工チームが見事に受け止めてくれて、稀に見る素晴らしい共同体によって実現しました。実に貴重な体験をさせていただきました。

施工者より

時が経つのを忘れるほど「ものづくり」に没頭した10カ月

10カ月という短い施工期間で鉄筋コンクリート造の約10,000㎡の校舎と学生寮が一体となった建物を完成させることができたのは、一つひとつの課題を納得いくまで議論したことと取引業者含めて皆が心ひとつに目標に向かって行けたことが大きかったです。

特に施工図、製作図の検討では伊東事務所、当社設計、現場サイドが三様にスケッチを持ち寄り、模型を作り、モックアップを作成して進

め、時が経つのを忘れるほど「ものづくり」に没頭しました。高い目標を持ち、たゆまない錬磨を重ねてその達成を体現できたことは今振り返った時に「正直辛いことばかりだったが、日々楽しかったし、やりきって良かった」という設計、現場を問わない若いメンバー達の感想に象徴されていると思います。

あらためてこの建物を通じて、「いい建物を作る」という根本に原点回帰することができました。



清水建設株式会社
関東支店 工事長
作業所長(当時)
田和英夫
Hideo Tawa



校舎内観。学生と教師が共に集うスタディ・ラウンジ

して権威的な空間にはならない。教室群、ふたつの中庭、階段の吹き抜け、広い通路が、空間の硬直化を避けてさまざまな居場所を生み出す。藤森泰司氏による家具、安東陽子氏によるカーテンも、空間に柔らかさを与えている。

低い円形校舎に付属するふたつのタワー状の学生寮は、個室をミニマムな空間としつつ、ハユニットの区画、あるいはワンフロアの二四ユニットなど、異なるスケールで共有するスペースをそれぞれ設定している。さらに寮と連結した校舎の部分も、学生による自由な使い方がなされていると言う。これは夜間においてもそうで、運営者がこの空間の可能性を切り開いているのだ。すなわち、校舎と寮が別々のものではなく、全体が

文字通りに学びの家として機能している。なお、直交座標系とならないデザインゆえに、手間を要する細部の収まりや迫力のあるコンクリートの階段など、難易度が高い施工も丁寧に仕上げられていた。

【選考委員】
五十嵐太郎・宮崎浩・河野晴彦



南側の並木広場に開くカフェテリア



竹の中庭から校舎をみる。
多様な交流を育む開放的な空間